

移行対象・移行現象からみる大学生における 分離不安に関する研究

信 田 敦

Separation anxiety of a university Student
from a transitional objective viewpoint

Atsushi NOBUTA

【要 旨】 青年期は親から自立していく時である。それは一つの対象喪失であり、そこには分離不安が生じる。対象の喪失を受け入れていく過程を通じて人は成長していくが、分離不安が強すぎる場合、自立が阻害されることもありうる。本稿では、青年期にある大学生および短大生の分離不安の克服について検討することを目的とした。研究Ⅰでは大学生および短大生255名に対し、移行対象に関する質問および青年期の分離・個体化の基本的尺度日本版を実施した。研究Ⅱでは、研究Ⅰで質問紙に回答してもらった者に対して面接調査を実施した。それらにより、移行対象と分離不安に関する仮説モデルを構築し、生育歴・家族内力動と移行対象との関わりから分離不安について考察を行った。そして、人が心的発達の過程で移行対象を創造し、やがて移行対象から離れていくことにより分離不安を克服していく姿を考察できた。

キーワード：分離不安，移行対象，青年期

問 題

対象喪失とは、自分にとってかけがえのない、大切な対象を失うことである。小此木(1979)によると、現代の人々は全能感に満ちた支配力によってコントロールできる人工的機械環境の中で暮らし、絶対に代わりのきかない存在は心から排除されてしまったという。そして、人々は対象喪失に出会うことのない生き方を身につけ、失っても傷つけない範囲の人間関係しか持たず、現代社会から対象喪失に対する悲哀そのものが排除されてしまったという。一方で、対象との分離の課題は人生のあらゆる場面で出現し、ライフサイクルの各段階ごとに獲得と喪失があり、喪の作業を繰り返しながら発達課題を越えていくことが求められる。これらのことより、対象との分離の問題の重要性が浮かび上がってくる。対象との分離には、分離に対する不安すなわち分離不安が生じる。したがって、分離不安の克服ということが人生において重要な課題になってくると考えられる。

分離不安について 分離不安とは、乳幼児が母親から引き離される時に示す不安のことである。分離不安それ自体は病的なものではないが、分離不安が強すぎる場合には生活上の問題が生じる。また高橋(2004)によると、母親から離れて独立しようという欲求と、いつまでも母親に依存していたいという欲求との葛藤は、思春期・青年期にも認められるものであり、成人の不安の中にも、これらを基礎とするものがあるという。分離不安は母親からの分離と再会の体験の積み重ねにより、子どもの中に母親表象が内在化されることにより克服していく。分離不安の克服には個人差が大きく、実際のところ完全に克服出来ている人は誰もいるものではなく、多くの場合折り合いをつけて生きている。分離不安は人生を通して克服し続けていくものと言えるだろう。

移行対象について 分離不安を克服する過程で現れるものが移行対象である。移行対象とは、幼い子どもが肌身離さず持ち歩く毛布や人形、動物のヌイグルミ

などを指す。牛島(1982)は、移行対象の臨床的特徴として、(a) 母親からの分離の際、分離不安や抑うつ不安に対する防衛として機能する、(b) 安らぎを与える、(c) 母親とのほど良い関係を基盤に生じる、(d) 母親に与えられたものであると同時に、自らが創造したもの、(e) 移行対象に付与されたエネルギーは、徐々に子どもの遊びや成人の文化的活動の領域に吸収されていくなどを挙げている。また、移行対象は自己対象、すなわち周りから言われた自分への評価を反復して表現する対象でもある。移行対象は分離不安の防衛として自分で作り出したものであり、母親からの自立の第一歩と考えられる。

分離-個体化について 分離不安は分離-個体化の達成の過程で克服されていくものである。Mahler(1975)は、子どもと母親が身体的・精神的に一体化した状態から母親表象を内在化していく過程、すなわち対象恒常性を確立するまでの過程を分離-個体化と呼んだ。その過程で子どもは、移行対象の助けを得て、母親と適切な距離が取れるようになり、自立していく。青年期になると、子どもは家族以外に愛情対象を見つけ、自立の道を歩む。青年期は親からの心理的、経済的な分離・自立の段階であり、Blos(1962)は青年期を第二の分離-個体化の時期としている。ここで再び分離不安の克服が課題となり、乳幼児期にどれだけ分離不安が克服されていたかということが、青年期における分離不安の克服において重要になると思われる。

これまでの研究にみられるように、分離不安と移行対象、分離-個体化、第二の分離-個体化は密接に関係していると思われる。しかし、青年期を対象とした分離不安および移行対象の調査的研究の数は少ないのが現状である。そこで本研究では、過去に用いた移行対象との関わりから、青年期にある大学生・短大生の分離不安の克服について検討することを目的とする。

研究 I

目 的

研究 I では質問紙調査を通して、過去に用いた移行対象との関わりから、青年期にある大学生・短大生の分離不安の克服について検討する。

方 法

調査対象 短大生および大学生255名(男性:43名(16.9%)、女性:212名(83.1%)、平均年齢=19.2歳(SD=1.55))

調査形式 授業時間の一部を用いて、集団で質問紙を実施した。

質問紙の構成 (a) 研究協力者の基本的属性要因。(b) 移行対象に関する質問。(c) 青年期の分離-個体化の基本的尺度 日本版(JASITA)。

結果と考察

移行対象の発現率について 移行対象があったと回答した人は218人であり、発現率は85.5%であった($\chi^2=128.475$, $p<.01$)。そのうち、移行対象から卒業出来たと思うと回答した人は184人(84.4%)であり、移行対象から卒業出来ていないと思うと回答した人は34人(15.6%)であった。移行対象は無意識的に用いられるため、実際のところ移行対象を意識化出来ていない人も多いと思われる。そうした中、本研究では85.5%の人が移行対象があったと答えており、移行対象をある程度客観視出来ている、すなわち対象化出来ていると考えられる。対象化出来るためには、自他の分離・分化が前提となる。なぜならば、何らかの欲求が向けられる目標として対象が存在している必要があるからである。対象化し客観化出来るためには、自分はその対象の外側に位置していることを意味している。このように考えると、移行対象を意識化出来たということは、自他の分離・分化が出来ており、対象として距離を置いて見れるということであり、分離不安がある程度克服出来ていると考えられる。

これらのことより、多くの人が心的発達過程の中、移行対象を創造し、やがて離れていくことにより分離不安を克服していることが推察される。

青年期の分離-個体化の基本的尺度日本版(JASITA)について 青年期の分離-個体化の基本的尺度 日本版(JASITA)の全52項目について、「全くそう思う」から「全く違うと思う」までの5段階の評定を、順に5点から1点まで点数化した。そして高橋(1989)が示した7つの下位尺度(「両親からの分離欲求」、「対人交流の拒否」、「自惚れ」、「共生欲求」、「分離-個体化の達成」、「友人関係の確立」、「一人でいられなさ」)それぞれの合計点を算出した。

また、移行対象に関する質問の結果から、グループA(移行対象があり、移行対象から卒業出来たと思うと回答した人のグループ)、グループB(移行対象があり、移行対象から卒業出来ていないと思うと回答した人のグループ)、グループC(移行対象がなかったと回答した人のグループ)、の3つのグループに分け

た。それぞれのグループについて、各下位尺度の合計点を算出した。そしてその3つのグループについて分散分析を行った。さらに、有意な効果が見られた場合には、Tukey法による多重比較を行った。その結果、

「自惚れ」で群の要因の効果は有意であった ($F(2,252) = 3.508, p < .05$)。多重比較によれば、グループAとグループCの間に5%水準で有意差があった。その他の下位尺度については、群間に有意な差が見ら

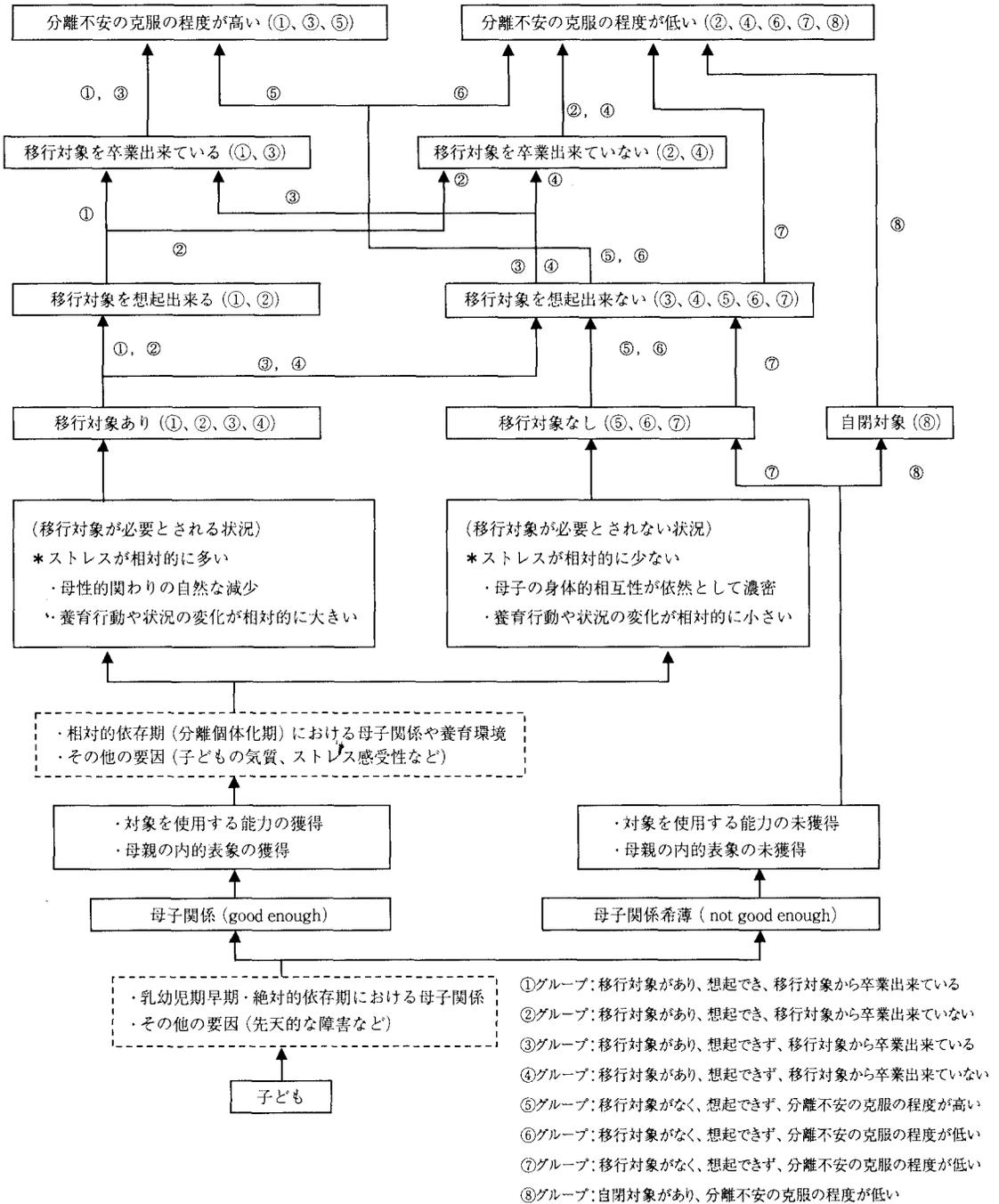


Figure 1 移行対象と分離不安に関する仮説モデル

れなかった。

自惚れ、すなわち自己愛についてFreudは、自体愛と対象愛の中間段階として自己愛を捉えていた。Kohutは自己愛について、未熟なものから成熟したものまで、また、病的なものから健康的なものまでであるとしている。Eriksonは母親との基本的信頼関係の成立により自分に対する自信が生まれ、これが健康な自己愛の始まりであるとしている。

自己愛という面から見た移行対象の意味について考えてみる。移行対象は母親の代理であり、自己対象でもある。乳幼児期に自らが母親に愛され、大切にされる体験により、母親との間によかった体験が実感されていく。この体験を基盤にして「自分は母親に愛される人間なのだ」という思い、すなわち自分の存在に対する自信を持つことができ、自分自身を大切にすることが出来ていく。この母親から愛された証ともいえる心的対象を、子どもは心的世界の中に形成していく。心的発達に伴い母親と分離をしていく際、母親から愛された証としての心的対象は移行対象に付与されていく。そして子どもは移行対象を大切にしていき、これは自分自身を大切にすることにもつながる。このように、健康な自己愛が育っていくためには移行対象は重要な役割を担っていると思われる。

自らが用いた移行対象を想起でき、移行対象から卒業出来たと認識できた場合、無意識的に行われている前述した心的過程をある程度意識化出来た、すなわち対象化して認識出来ているということである。成熟した自我を形成し、健康な自己愛を育み、分離不安の克服の程度も高いと推察出来る。

「自惚れ」以外の下位尺度においては、群間に有意な差が見られなかった。これについて、遠藤（1989）が示した仮説的モデルを、筆者が修正および追加行い仮説モデルを構築した（figure 1）。①グループは移行対象があり、移行対象から卒業出来たと認識出来ているグループである。無意識的に用いられていた移行対象を意識化することが出来ており、さらに移行対象から卒業出来たと自覚出来ている。移行対象をある程度客観視出来ている、すなわち対象化出来ていると考えられる。前述したように、対象化出来るためには自他の分離・分化が前提となる。これらのことより、自他の分離・分化が出来ており、対象として距離を置いて見ることが出来、分離不安の克服の程度が高いと考えられる。

②グループは、移行対象があり、移行対象から卒業

出来ていないと認識出来ているグループである。移行対象を意識化出来ているということは、対象化して移行対象を捉えているといえる。また、移行対象から卒業出来ていないが、そのように自覚出来ているということから分離不安は自我の統制化に置かれ、意識的・無意識的に分離不安を克服している過程にあるとも考えられる。

③グループは、移行対象があったが移行対象を想起出来ていない。しかし移行対象から卒業出来たグループである。移行対象を意識化出来ないということからは、十分に対象化出来ていないと考えられる。だが移行対象から卒業出来ているということから考えると、母子関係および移行対象との関係において満足のいく体験をした後、意識的には忘れ去られたものの無意識の中には移行対象の持つ重要な要素は残っており、それが文化的分野に広がっていったと思われる。

④グループは、移行対象があったが移行対象を想起出来ず、移行対象からの卒業も出来ていないグループである。移行対象とは、自分が親から受けた愛情を対象化したものである。移行対象を意識化出来ないということからは、十分に対象化出来ていない、すなわち母親から愛された自分を十分に対象化出来ていないと考えられる。母親とのよかった体験をあまり実感出来ず、自分が愛されたという思いが乏しいとも考えられる。

⑤グループ及び⑥グループは、移行対象がなかったグループである。遠藤（1989）によるとこのグループでは、早乳幼児期においてほどよい母子関係に支えられ対象を使用する能力を発達させているが、相対的依存期以降、母子関係の質の変化が相対的に小さく依然として母子関係が濃密であるため移行対象が必要とされる状況になく、結果的に移行対象への愛着が見られなかったと論じている。母子関係が依然として濃厚ということは、母親の分離不安も大きく関係していると思われる。母親の分離不安が十分に克服されていないと、子どもが母親から分離・自立しようとする、母親の分離不安が賦活され子どもを自分の手から離せないという動きが生じる。子どもの分離への動きを阻害するため、子どもの側の分離不安の克服の程度も低くなると思われる。

⑦グループおよび⑧グループは、遠藤（1989）が述べた早乳幼児期の絶対的依存期にある時のほどよいとはいえない稀薄な母子関係に由来した、対象を使用する能力を発達させることが出来なかったため移行対象がなかったグループである。

また、⑧グループを理解する際、自閉対象 (autistic object) という概念が有用である。自閉対象とは、(a) その物の本来の使われ方がされない、(b) 奇妙で儀式的な使い方がされる、(c) 空想が伴わず、感覚的な使い方がなされる、(d) 母親の代理物ではない、(e) 硬いものであり、この硬さにより傷つきやすい心を防衛する、などの特徴がある (井原、2006)。移行対象が現実への架け橋であるのに対し、自閉対象は現実への防壁であり、子どもを人から遠ざけるものである。このように考えると、稀薄な母子関係の中、基本的信頼感の獲得やほどよい母子関係の内化、対象を使用する能力の獲得などが十分に出来なかったため、自閉対象に固執するものと考えられる。自閉対象には母親から愛されたという証という意味合いは含まれず、人との関係をつなぐ意味合いも含まれない。現実への防壁という意味合いが強いことから、分離不安を克服する上で役立つものにはなりにくいと思われる。

ここで、移行対象があったと認識しているグループについて、自閉対象という観点から再考してみる。井原 (2006) によると、愛着行動、執着行動、固執行動は、次第に否定的な意味合いを強める同じ連続線上にあり、愛着行動や執着行動の現われとして移行対象があり、固執行動の現われとして自閉対象があるとしている。その連続性の性質のため、本人の主観としては「移行対象があった」と認識している人の中に、自閉対象としての意味合いが強い対象の用い方を行っている人が含まれる可能性があると思われる。

分離不安と移行対象の関係について考えた時、前述した仮説モデルは一つの仮説に過ぎないが、そこで示されたように単純には割り切れない様々な要因が関与していると思われる。様々な要因を考え、理論化し、それに基づいて研究を進めていくことの重要性を示していると考えられる。

研究II

目的

研究IIでは面接調査を通して、生育歴・家族内力動と移行対象との関わりから、青年期にある大学生・短大生の分離不安の克服について検討する。そして、研究Iによって得られた仮説モデルについて、事例を通して理解していく。

方法

調査対象 研究Iで質問紙に回答してもらった者の

うち、面接の協力が得られた人の中から2名に対して面接を実施した。

面接方法 面接は筆者が面接者となり、一対一の個人面接で実施した。面接回数は1回、面接時間は1時間とした。面接では、最終的には聞くべき質問項目を押さえつつも、研究協力者が連想や心の動きを自由に展開していけるように聴いていった。面接における質問項目をTable 1に示す。

結果と考察

Aさん

家族内の対人関係および生育歴からの考察 小さい頃から両親の仲が良くなかったこと、母親が夜働きに出ていたことは、Aさんにとって意識的・無意識的に大きな影響を与えていたと思われる。父親が母親の代理としてAさんに母性的なかかわりをしていたことは、Aさんにとって「ほどよい母親」の体験だったと思われる。眠る際Aさんが抱いていた母親の枕は、母親がいない不安への防衛ともとれ、無意識では母親を求めていたと思われる。

Aさんの最も古い記憶は、Aさんが母親からの授乳中、姉がAさんを押しつけたという出来事であった。これは、姉が妹であるAさんを羨ましく思い、取った行動である。すなわち、周りから見て、母親とAさんの関係がうまくいっていたと見えるからこそ姉はこのような行動を取ったと考えられる。このことより、授乳期間中のAさんと母親の関係は非常に良好であったと思われる。

移行対象からみる分離不安の問題 Aさんの「小さい頃は寂しかったと思う」という言葉が象徴するように、Aさんにとって移行対象は寂しさからAさんを守るものであったと思われる。Aさんの寂しさは、かつて親との一体感を持った経験、すなわちよかった体験があるからこそその寂しさであり、その記憶からすれば今は寂しいということになるのである。つまりこの寂しさは、一体感の持てる楽しさへの憧れであると考えられる。また、「移行対象は父親の表象だと思う」というAさんの言葉からも、父親との良い関係、父親に愛された自分を移行対象に投影している。またその裏には、母親に十分甘えられなかった思いを移行対象に付与し、移行対象に甘えることにより満たしていたと考えられる。

一方で、Aさんの「移行対象を持っていたら一人で大丈夫という感じだった」という言葉からも、移行対

象がAさんの自立を促す、すなわち分離不安の克服に重要な役割を担っていたことが分かる。

全体的理解 Aさんの中には自分は必要とされているのだろうかという不安や寂しさがある。最初に産まれてきた子どもは、親の自己愛の対象として大切にされる。だがAさんのように二番目に産まれてきた子どもは、親にはすでに自己愛の対象がいるので、親は二番目の子どもを自己愛の対象としてあまり必要としない。そのため二番目の子どもは誰であっても寂しい思いをすることになる。しかし、親の自己愛の対象にならないため、自由でのびのびとしていく。この自由さがAさんにはあるように思われる。また、Aさんは学生というモラトリアムの時期を過ごしている。この先

社会に出た時、自分が必要とされる人物になるかどうかAさんの取り組む課題となってくるであろう。

Aさんは親とよかった体験を経験し、移行対象もあり、感情をおつけることの出来る相手もいる。とても健康で、分離不安もかなり克服していると考えられる。

Bさん

家族内の対人関係および生育歴からの考察 母親はとても厳しかったようであるが、Bさんは母親からの愛情を十分に経験し、母親に愛着を形成していた。それは幼稚園で女性の先生に憧れていたことから分かる。つまり、母親との関係の中で一体感を経験し、内在化された母親イメージを幼稚園の先生に投影し、慕

Table1 面接における質問項目

家族に関する項目	父親の性格 母親の性格 きょうだいの性格 0～6歳頃の家族との関係 0～6歳頃の両親の夫婦仲 現在の家族との関係 現在の両親の夫婦仲
最も古い記憶	
乳幼児期の生育様式	授乳様式 母親の就労様式 就寝様式 就寝の儀式 トイレット・トレーニング 母親との分離場面でのエピソード 幼稚園での様子
移行対象に関する項目	どんなものを持っていたか いつ頃から持ち始めたか 持ち始めたキッカケは何だったか どんな時に持っていたか 持っているときどんな気持ちだったか 持ちたい時になかったらどんな気持ちだったか 移行対象は自分にとってどんな存在だったか 移行対象に関する思い出 移行対象に対する両親の態度 いつから持たなくなったか 持たなくなったキッカケは何だったか きょうだいは移行対象を持っていたか きょうだいを持っていた移行対象についてどう思っていたか
移行対象を持たなくなった後、寂しい時などに心を慰めてくれるものの存在	どんなものか どのような時に持つか 持つときどんな気持ちになるか

っていたと考えられるからである。

Bさんと父親の関係は、高校までは良かったようであるが、小さい頃の父親との記憶はあまりないとのことである。父親との共通の話題は父親が好きなスポーツであった。Bさんは高校ではそのスポーツをクラブ活動に選択しており、そこには父親を求める気持ちがあったと思われる。また、両親の夫婦仲に冷たさがあると、母親は息子に、父親は娘に関心が向きやすくなる。その結果、娘は父親の関心のあるところに同一化し、それを追い求めて行くことになる。

移行対象からみる分離不安の問題 Bさんは移行対象として、大きく、硬く、黒い熊のぬいぐるみを常に持っていた。これは母親の表象でもあったと思われる。また、移行対象は、その対象と自分が同一化される面がある。大きな熊は存在感があり、安定感もある。この大きさはBさんの自我の健康さをあらわしていると考えられる。

移行対象を持ち始めたキッカケは母親が弟を妊娠したことであり、母親を弟に取られるのではないかという不安があった。移行対象に安心して十分にかかわることにより、弟に母親を取られるのではないかという不安、母親に見捨てられるのではないかという不安を克服していったと考えられる。

全体的理解 Bさんの移行対象の持ち方、愛着の強さなど、とても健康的な動きを感じる。現在の母親との関係、弟との関係など、とても良好な対人関係の持ち方が出来ており、分離不安もかなり克服していると考えられる。

総合的考察

森田(1998)によると、青年期は自分独自の価値観の形成や職業選択などを通じ、心理的にも経済的にも親からの自立がなされ、個としての自分が確立される時期であるとされている。親からの自立は一つの対象喪失であり、そこには分離不安が生じる。喪の作業、すなわち対象の喪失を受け入れていく過程を通じて青年は成長していくものと思われる。しかし、分離不安が強すぎる場合、青年の自立は阻害されることもある。分離不安の克服というテーマは人生を通じてなされる重要な課題であると思われる。

青年期を対象とした分離不安および移行対象に関する研究が少ない現状において、本研究ではその一考察が行えた。また、移行対象の発現率を見た時、単純には比較することは出来ないが、日本における従来の研

究と比べると高い数値であったことも興味深い。そして、従来の研究ではあまり見られなかった健康な自己愛という観点や対象化という観点から分離不安および移行対象について考察することが出来た。また、青年期の分離-個体化の基本的尺度日本版(JASITA)を実施し、分離不安と移行対象についてあくまで一つの仮説モデルにすぎないが、仮説モデルを構築し考察を行えた。そして、事例を通して分離不安の克服についてより個別的にみていくことにより、より多面的に考察が行えた。移行対象は母親の表象である。それと同時に、移行対象は自己対象でもある。すなわち、周りから向けられた評価を移行対象へ向けることにより、その評価を自分のものにしていく対象である。例えば、子どもが周りからそそがれる愛情を移行対象に投影し、子どもが移行対象を愛することで、周りからの愛情を自分のものにしていく。これらのことが面接を行うことにより考察することが出来た。

また、アンケートや面接を通して、研究協力者は自分の抱えている問題に直面でき、親に対する関わりを考えることが出来たことで、母親との分離不安をさらにうまく克服出来るのではないかと思う。そして、多くの人が心的発達過程の中、移行対象を創造し、やがて移行対象から離れていくことにより分離不安を克服していく姿を考察出来た。

今回質問紙を実施したものの、分析において用いることが出来なかった項目についても今後分析を行い考察していきたい。また、今回の面接調査では2名の実施という少人数であった。丁寧に詳しく考察していくことが出来たという面があるが、今後は多くの事例を通して、より具体的に仮説モデルを考察していきたい。そして、移行対象と分離不安に関するさらなる論理的思考を進め、仮説モデルが妥当であるかの検討を重ね、仮説モデルの精緻化を行い、実際に調査を行う際どのように細やかなグループ化を行うか、などが今後の課題である。

引用文献

- Blos, P(1962). On adolescence: A psychoanalytic interpretation. The Free Press of Glencoe
(プロス, P. 野沢栄司(訳)(1971). 青年期の精神医学 誠信書房)
- 遠藤利彦(1989). 移行対象に関する理論的考察とくにその発現の機序をめぐって— 東京大学教育学部紀要 29. 229-241.

- 井原成男 (2006). 自閉症と移行対象 井原成男 (編) 移行対象の臨床的展開 岩崎学術出版社 pp.77-92.
- Mahler, S. M. (1975). *The Psychological Birth of the Human Infant*. New York: Basic Books Inc.
- (マラー, S. M. 高橋雅士・織田正美・浜畑紀 (訳) (1981). 乳幼児の心理的誕生 黎明書房)
- 森田慎 (1998). 青年期の自立をめぐる「さびしさ」の体験の意味について—心理的融合と分離不安— 京都大学大学院教育学研究科付属臨床教育実践研究センター紀要 2 59-71.
- 小此木啓吾 (1979). 対象喪失 中公新書
- 高橋蔵人 (1989). 青年期における分離个体化に関する研究—質問紙調査による考察 心理臨床学研究 7(2) 4-14.
- 高橋裕子 (2004). 分離不安 氏原寛・亀口憲治・成田善弘・東山敏久・山中康裕 (編) 心理臨床大事典 培風館 pp.919.
- 牛島定信 (1989). 過渡対象をめぐる 精神分析研究 26(1) 1-19.